

# ばら屋敷

## 名村和実



伊垣村、上ノ井地区の外れに、ばら屋敷と呼ばれる家があった。敷地の周りを野ばらで飾っていたからだ。飾るといふより、伸び放題と言った方が当たっている。杉下は、幼馴染みの、植松の後に付いて、シシ狩りに出かけた帰り、ばら屋敷の噂を聞いた。ひと山越えた反対斜面の一軒屋だから、村人も訪れることがない。滅多に顔を合わせないのは、ばら屋敷に限ったことではない。地区が異なれば、年に一度か二度、祭りの時に会うくらいである。だから気にしなくていいのだが、新聞を止めたという一言が、どうも気になる。

山の谷間を縫って染川が流れている。この川沿いに県道百四十二号線が走っていて、下ノ井地区から上流に向かって中ノ井、上ノ井となっている。その先に人家はない。山間を通り抜け、村境を越えて行けば、国道に出て山脈越えになる。峠を越えれば隣の県だ。

井ノ垣は、下ノ井から山の斜面を登って上に出たところの台地で、伊垣村の役場があり、人口も多い。役場まで徒歩なら四十分ぐらいだが、車で行くとなると、幾つもの山裾を大きく迂回するので一時間半はかかる。道路は、山の反対側の県道三十五号線を用いるので、川沿いの三ノ井地区とは生活圈を異にする。下ノ井、中ノ井、上ノ井の三地区を併せて三ノ井と言った。逆に下ノ井から下流に、車で五十分も下れば漁師町に出る。国道

をさらに十分上ると人口三万の、亀井市の市街地に出る。日用品や衣料は、この亀井市まで出る。

下ノ井には五軒の集落と、脇道に逸れたところに二軒と計七軒ある。脇に入ったところの一軒が杉下の家だ。比較的近くの中ノ井には、三軒と川向こうの中腹に一軒ある。上ノ井は、山裾を二つ越えて向こうだから、飛び離れて遠い。一番過疎化がひどく、県道脇に二軒と、山向こうのばら屋敷と三軒しかない。

バスは一日三往復走っていて新聞配達も兼ねている。停留場が中ノ井にあり、その前にある植松の家に、十四軒分まとめて置かれるのだ。中ノ井は、昔は二十軒ほどの集落で人口も多い方だった。その名残で停留場がある。植松の親父さんがバイクに乗って下ノ井と上ノ井に持っていく。新聞を置く一軒の他の家は、置かれた家へ取りに来ることになっている。新聞を置かれた家は、出ることがあったり、親切で持っていくこともあるが、上ノ井のばら屋敷へは、毎日持って行くことはできない。またばら屋敷も毎日取りに来ることは容易でない。乗り物は自転車すら使えない。山道を登って下って片道三十分かかる。三日に一度あるいは一週間に一度、まとめて取りに来ていたそうだ。最近はその大儀になったのか、半年前に新聞を止めた。止めてからは殆ど様子がわからないという。

杉下は、村に帰ってきて三ヶ月になる。まだ日が浅いので戸惑うこともある。しかし高校を卒業するまで住んでいたのだから、知らない人たちではない。遠慮することなく聞けば快く教えてくれる。来たときは、みんなに歓迎された。何と言っても二歳下の植松が一番喜んだ。同年代の殆どは外に出てしまつて、植松だけがこの村でがんばつてきたのだ。

杉下は、高校を卒業すると街に出た。就職を都会に求めたのだ。山の上にある井ノ垣の叔父の家まで脚で登つて三十分、預けてある自転車で高校まで一時間かかった。クラブ活動も充分に出来ず不便だった。だから田舎が嫌いというわけではないが、一生をこの地で過ごすという気にはなれなかった。都会へ出てみたかった。あこがれていたのだ。両親と妹を残して大きな街へ出た。

職場結婚をし、子どもが出来て妻は会社を辞めた。郊外に家を立て、いつの間にか定年退職し、妻と二人きりに戻っていた。熟年夫婦が、過疎地の空き家となった農家を買取つて、住んでいることをテレビ放映していた。何か物足らなさを感じていた杉下は、妻の美代子に田舎で暮らしてみたいと話を持ちかけた。「あーら、その歳になつてお義母様のお乳を飲みたくなつたの？ どうぞお一人で」と、取り付く島もない返事だった。父は既に死に、妹は嫁いで、八十歳になる母が一人、今もかくしゃくとして暮らしている。

父が十年前に入院して亡くなるまでの三ヶ月間、美代子は下ノ井の実家に移り住み、妻にとつては義母と二人で暮らし、交代で父の面倒を見た。隣近所ともうまくやつていたようで、嫁と姑の仲が悪いと言つてもない。今回一緒に来ないのは、定年になつて杉下の甘えが出てきたと思つて

いるらしい。美代子は「お義母様にもしものことがあつたら、いつでも駆けつきますから、ご安心なさいませ」とも言うのであつた。妻は、若いときに身に着けた華道の免許を生かして先生をしている。公民館活動で忙しく充実しているのだ。一戸立ちマイホームを無住にするわけにもいかない。

息子や娘が、孫を連れて帰ってくる場所を、人気がない冷たい空間にするわけにもいかない。自分たちの生活の場を守りつつ、夫のわがままも聞き入れる、美代子なりの計算が出来ているのだ。

杉下は、植松の「堅苦しゅう考えんときんさい、別荘暮らしをすると思

うて。おふくろさんも喜ぶじゃろ」という勧めもあつて、来てみたのだ。母は実に元氣だ。この歳になつて、毎日畑に出て鋤を振るうことを怠らない。一緒に畑仕事に出ても、六十一になる息子の方が腰を痛めてはかどらない。茶目つ氣もいまだに旺盛である。美代子さん、一人で放つといて大丈夫かえ、と言う。あのカルチュアというやつが危ないんじゃないかと、言つてこちらの顔を覗き見るように窺う。

先日夕食のとき、ばら屋敷のことを言い出した。「昌ほう」。杉下の名は昌明で田舎では、昌ほう、で通つている。「藤子さんとこ行つちやいけん」という。ばら屋敷の娘は藤子と言つた。牽制球を投げて来たのだ。娘と言つても杉下より五歳下だから、数えてみれば五十六歳になつている。藤子の家は先代から山持ちで、住んでいるところから奥へ、ふた山とも自分の山だ。時代とともに山の仕事も実入りが少なくなつて、手入れが行き届かず、今は殆どが荒れているという。

杉下の家と藤子の家はなぜか、昔から仲が良くない。理由はわからない。人が死ぬとあそこの家は崇たかられていと噂するのだった。

杉下が高校三年生の時、藤子はまだ中学一年で、両親と祖父母と五人暮らしだった。祭りの夜、妙に藤子と気が合つて遅くまで無駄話をしていた憶えがある。主にクラブ活動の話だった。藤子は体格が良かったのでバスケットボール部に勧誘されて入つたが、ああでもない、こうでもないと言つて口を閉ざすような話だった。青臭い子ともっぽい話だと、心では思いつつながら、兄のように頼られて悪い気はしなかつた。それから、村の子どもの達の間で二人は仲が良いという噂が立つた。母から「付き合つちやいけん」と注意されたが、もともと付き合うというような感覚はなかつたので、大人のうるさい雑言として気にしなかつた。年を越して、杉下がいよいよ村を出ることがはつきりして来た頃は、取り立てて二人のことを言う者もいなくなつていた。

出立の一週間ほど前だった。神社の、境内裏の空き地で二人は会つた。帰つて来るか、と言うので、帰つて来ると約束をして手を握り合つた。杉下は軽い気持ちだった。中学二年になろうとしている藤子は、もはや大人になつた気分だったのかも知れない。杉下から見れば、まだ中学一年生で

青葉の匂いが拭えなかった。相手を慰めるつもりで、その場の気持ちを静めるために、安易に約束をしたのだった。

都会に出てしばらくすると、藤子から手紙が来た。二、三回文通したが、日常に流され途絶えてしまった。自然な成り行きだと考え、気にもしなかつた。交通費を考えると、何度も家に帰るわけにはいかない。二年後の正月に帰ったが、近所の人に会っただけで戻った。

さらに三年後、杉下二十二歳の秋。就職して五年目の時は、村の祭りに併せて、休暇を取って帰った。このとき、高校三年生になっていた藤子に会った。藤子に会ったのはこれが最後である。藤子は、祖父母二人とも続いて亡くし、病弱だった母までも亡くしていた。藤子の父と二人暮らしになっっている。杉下の母は、ののしるようにはそほと話すのだった。「呪われている、あんな所に増築したのがいけん、祟りだ」と言いつつ、藤子の祖父母達が次々と亡くなったときの状況を、根掘り葉掘り話すのだった。母の意図とは別に、杉下は内緒で、藤子の家を訪問することに決めた。

母には、井ノ垣の友達に会ってけると嘘をついて、藤子の家に行った。藤子の父は、よく来てくれたと喜び、早速酒の用意をしてくれた。杉下は仏壇の前に座り、線香をあげてから黙祷をした。それから子どもの時分に会ったきりで、随分と長い月日の経ったことを、懐かしんで話しかけた。藤子の父も、杉下の家をさほど快くは思っていない。けれど息子の昌明にまで、その態度を表すような浅はかな人ではない。むしろ「若いのに、よう足を運んでくださった」と本心に喜んでくれている。杉下が、お父さん、と言って呼びかけるので、くすぐったく思ったのか「この先も、そう呼んでやんさいね」と言った。自分に対して悪い気持ちは持っていない、良い印象を持ってってくれているとわかったが、一瞬言葉の意味が理解できず、応えることなく次の話題に移って行った。

酒の肴を作って出してくる藤子は、とても高校三年生には見えず、家庭の主婦のように思えて一瞬ドキリとした。青臭いと思っていた藤子が、年に似合わず年配の熟女に思えたのだ。藤子も杉下と同じ高校だったので、学校の話はすれは尽きることがない。話を切り替えて、先生の転出転入のことなど、学校の様子を尋ねた。藤子は高校に行つてからもバスケットを続けていて、背丈も胸も一段と大きく成長していた。父親が席を立って

る間に、祭りが終わった次の日、神社裏の小さな広場で逢う約束をした。

村の祭りも人手が少なく、省略々々で味気ないものになってきているが、村人が顔を合わすと言うことでは、大切な行事だ。行事の終わった夜は、植松を中心に、この村だけでなく近郷の若い者を集めて酒を飲んだ。藤子の家のことは、あまり話題に上らなかつた。出るには出たが、すぐに別の話題へと流れて行くのであつた。

翌日は、二日酔いで頭が痛かつた。午後になってようやく我を取り戻し、急いで神社裏の空き地に行くと、藤子はすでに来ていた。木に凭れての立ち話だ。頭の、髪の毛が杉下の目の高さにある。並んで立つと、随分成長したことがわかる。藤子の若さが眩しくて気後れするが、表には出さない。「大きくなつたね」と話し始める。

都会での暮らしぶりを聞くので、街の様子やアパート周辺の住宅街のこゝと、繁華な駅前街の様子などを、できるだけリアルに話した。杉下は、藤子が住んだことのない街の暮らし振りを、聞きたがっているのだと思いついて話していた。けれど、そうではなかつた。杉下が街の暮らしを気に入っているのかどうか、現在の気持ちを確かめるためだったのだ。

話の腰を折って「それで、いつ、帰つて来るんじゃ」という。言葉の意味がすぐに呑み込めなかつたが、五年前、同じこの場所で藤子の言った言葉の思い出した。中学一年のまだあどけない少女の言葉として、さほど気にも留めていなかった。同じ言葉を再び聴いて、大きくなつた藤子の体重が、のしかかってくるように思われた。

いつの頃だったか、山桜の根元から、ひよろひよると、小さな青い葉っぱを付けて、芽を出している草のような若木を引いて来て、屋敷に植えた。今では庭の王者のように成長して、季節になると花を咲かせている。重機で引き抜こうにも、一筋縄でいかないほどに、丸々と太くなつた幹を輝かせている。以前「帰つて来るか」という言葉に、安易に約束をしてしまった。その言葉が、庭の山桜のように生長して、いま目の前に突っ立っている。

杉下は言葉に詰まつた。藤子は黙っている。杉下の方に向き直つて目を瞑つた。杉下は藤子の肩に腕を回し、軽く抱いた。髪の毛が鼻孔に触れ、微かなシャンプーの匂いがした。豊かな胸の感触に、強く抱きしめたい誘

惑に駆られたが、出来なかった。藤子は明らかに接吻を求めていた。けれど躲かしてしまった。まだ都会に未練があったのだ。杉下は藤子が嫌いではなかった。むしろ好いているといつてもよい。しかし将来を考えるまでにはならなかった。都会での生活を続けたかったし、そこでの自分を、もつと試したかった。藤子の気持ちもよくわかる。空き地の端に、誰が植えたのか野ばらが小さな花を付けていた。杉下は折って取り上げ、藤子に渡した。藤子は受け取って「棘に刺されるといつまでも痛いんじゃない」と言った。杉下は家まで送るつもりで、一緒に帰ろうと言ったが、藤子は強く否定した。その後、ばらをどうしたかわからない。

街に戻って日常が始まると、田舎のことはすっかり忘れていた。目先の毎日を生きていくのに精一杯であった。すっかり都会の人間になっていた。二十七歳で結婚したときも、式を田舎で挙げるなど、思いもしなかった。職場と、そこでできた友人関係を中心として、都会のホテルで行った。杉下が結婚する噂は、それとなく田舎でも流れて、藤子からも祝の品が実家に届けられた。型どおりの返しをして時は過ぎていった。

杉下は、子供が出来てから、正月と夏には、妻の実家か自分の実家へ帰省するよう心がけてきた。けれど、仕事の都合もあり、毎回というわけにはいかない。子供が大きくなってくれば、実家ばかりではなく家族旅行も楽しみたい。そんなわけで、田舎のことは、遠い国の出来事のようになっていたが、帰れば何かと母から情報が入る。

杉下三十一歳、長男が三歳、長女一歳になった年の正月、家族で帰省したときだった。母が「ばら園の藤ちゃんが」などと話すのでいぶかしく思った。聞いてみると、家の周りに幾種類かのばらを植え、きれいに手入れしているの、誰とはなしにばら園の藤ちゃん、と呼ぶようになったらしい。藤子は、父親一人を残して、家を出るわけにもいかず、バスで一時間かけて出たところのスーパーで働いていた。家ではばらを育てて楽しみにしているのだと思った。

話を聞いていた妻の美代子が、そのばら園を見に行きたいと言いつつ、母は即座に否定した。杉下の家とあまり仲のよくないことを察知した美代子は、以後ばら園のことは口にしなくなった。

夕食の後、美代子は子供を寝かせるために座敷に引き上げた。その後母

は、声を潜めて藤子の父の悪口を言うのであった。聞いていても何が悪いのか理解ができず、むしろいい人のように思えて、話の内容が頭に残らない。そんな曖昧な話の中で、心に引つ掛かってきた言葉は、藤子は、結婚しない、と言っているらしいことだ。なぜだかわからない。ばら園を始めたということにも、何か引つ掛かるものがあった。けれど瞬く間に正月が過ぎていき、街に戻って日常が過ぎていった。

その後も、下ノ井の実家へは二、三年毎に帰省していた。ばら園は少し有名になり、地方新聞で取り上げられたこともあって、遠くから訪ねてくる見物客もあるという。母は相変わらず、つべこべ言っていたが、その話を聞いて心ひそかに嬉しく思った。藤子が立派に故郷を愛し守っていてくれるのだと思うと、心強かった。霧が晴れるような気もした。街に出て帰らなかった自分に、ほんの少し心が痛んだ。藤子のために何も出来ないが、心の中だけでも、応援しようと思うのだった。

一つ理解できないことがあった。井ノ垣や三十五号線から観に来る人もいるという。そんな山道はなかったはずだ。訊ねてみると、ばら園の奥の山に吊橋が出来て、井ノ垣の中央を通る三十五号線に出やすくなくなったそう。ここでまた母の一演説があった。便利になったのはばら園だけで、三ノ井の者には、米ひと粒の利益もないと、ぼやくのだった。吊橋は、ばら園のためだけに出来たわけではない。山仕事や炭焼きには、どうしても必要な道なのだ。

杉下は想像してみた。吊橋を渡って、山を登って下って、又上ってその向こうの高台に出るのだ。一時間以上はかかるだろう。下ノ井は、裏の山道を登って井ノ垣に出る昔からの道がある。そのことを考えれば、上ノ井に吊橋ができたのは、当然と言えるし、遅いくらいだ。景観がよさそうな感じがする。

杉下四十七歳、長女が十七歳のときの夏、妻と三人で下ノ井の実家に帰った。長男は大学に行つて好きなことをやっている。長女も、もう一年大きくなれば付いて来なくなるだろう。父母が健在のうちに、できるだけ来ておきたいと思った。父は口数が少なく殆ど話に加わらない人だが、長女が来るとニコニコしている。長女もまたお祖父ちゃんっ子で、十七歳にもなつて、子どものように甘えている。

母は何かにつけて「昌ぼう」と杉下に話しかけてくる。それを美代子が一緒に聞いて聞いている。藤子の家の呼称が「ばら園」でなく「ばら屋敷」に変わっていた。藤子の父親がかなり弱ってきたこともあるが、藤子が手入れをしなくなって、荒れているというのだ。その上、奇妙なことを言っているのかもしれないし、貰い子をしたのかもしれない。取り立てて言うことではないのだが、藤子の子ではないのかと、勘ぐるのである。そういえば五、六年前、入院していたのか半年ばかり藤子を見かけなかったとか、あれは子どもを産むため身を隠していたのだとか、あることないこと噂するのだった。母の話は大げさで信用できない。植松の話では、どんないきさつがあったのかはわからないが、貰い子をしたということで、余分な尾ひれは全くなかった。

杉下は年齢を練ってみた。藤子は四十二歳だ。藤子の父の年齢はよく知らないが、七十歳になるかならないかだろう。少々弱ってきたとしても、藤子はまだ若い。なぜ庭の手入れをしなくなったのだろう。こちらの方が気にかかる。杉下は、ばら園が荒れてばら屋敷になっているらしいことに、胸が痛んだ。

この後、子供達と一緒に実家へ帰ったのは、父が亡くなった時だ。杉下五十一歳、親子四人はばらばらに暮らしていた。長男は就職して一人暮らしをしていたし、長女はまだ大学生で下宿していた。妻は数ヶ月前から母と実家に住んでおり、逆に我々を迎える立場である。葬儀が終わったら未練を残しながらも、みんなそそくさと戻っていった。杉下自身もゆくりしていることができなかつた。職場がゆるさないう。ばら屋敷の噂は、殆ど聞くことなく元の生活に戻った。

しばらくして、妻の美代子が実家から戻り二人の生活が始まった。病床の父の付き添いのためとは言え、三ヶ月も杉下の実家で過ごしたのだ。妻にとつては、夫の実家で姑と二人、生活したわけだ。杉下の良いことも悪いことも、幼い子供時分の、己の知らないことまで情報を得たのではないかと気にかかる。それとなく誘いを入れると「気になる？」と言って、結局は色々喋ってくれる。しばらくは食卓の話題も事欠かさなかつた。しかし、ばら屋敷のことや藤子のことは、一言も出てこない。杉下は自分か

ら聞くのも気が引けて、そのまま月日は流れていった。

父が死んでから十年が経つ。杉下は自由な身になって、下ノ井に帰ってきた。この歳になって帰ってきて、藤子に合わせる顔はないのだ。けれど、新聞を止めたと聞いて胸騒ぎがする。ばら園が荒れていると聞いて十四年になる。藤子は五十六歳になっているはずだ。けれど杉下には十七才の藤子しか想像できない。

小骨の多い魚を食べると、魚肉と骨を分けるのが面倒で、この程度ならいいだろうと食べてしまう。喉の奥に細い小骨が引っかかって、なかなか取れない。一週間経つても二週間経つても取れないことがある。胸の中に引っかかった棘は、いつまで経つても取れないばかりか、年月とともに、徐々に緩やかに成長していることさえある。杉下は六十一歳という自分の年齢を忘れて、二十二歳の時、神社裏で話した藤子が蘇ってくるのだ。

母の妹が隣の町に嫁いでいて、妹達と月に一度お茶をする。一日中噂話をして時間を潰すのだ。大方は母の方が出かけていく。向こうは少々街で、近くにスーパーマーケットもある。欲しくなった物を買いに走るのに便利なのだ。母と同年の夫と二人暮らしで、ちょうど良い茶飲み友達である。母が一人暮らしの時は、朝のバスで漁師町まで出て、国道を走るバスに乗り換えて行っていた。杉下が帰って来てからは車で送っていく。杉下にとつては叔母さんの家だ。今回は母が泊まると言っているの、杉下も泊まるようにしきりに勧められた。けれど用があるからと断った。この機会に、昼からばら屋敷を訪ねるつもりだったからだ。

三ヶ月住んで、子ども時代の感覚がかなり蘇って来た。だいぶ山道にも慣れてきて、杉下は獣道を歩いて藤子の家まで行くことにした。会えば三十九年振りだ。何から話しかけようかと思索する。山が開けて谷間の平地が見えてきた。ばら屋敷の庭だ。周囲は奥深い山に囲まれて、道路一本通っていない。藤子の家には、畑や山仕事に必要な、荷車やリヤカーはあっても、乗り物は自転車すらない。あっても周囲が山では使えない。のだ。奥の山から滝が一本落ちていて、滝つぼから流れる水を引いている。ばら屋敷専用の水道だ。実に長閑である。人はどこからも入って来ない。

ばら屋敷に用のある者しか、入って来ないのである。

生活道路の百四十二号線沿いの上ノ井へは、山を登って下って三十分かかる。反対側の山に、三十年前吊橋が出来た。それを通って三十五号線へ出れば井ノ垣はすぐ近くだ。けれど一時間もかかる。井ノ垣へ出て買物するにはよいが、背に荷物を背負って一時間かけてまた戻らなければならぬ。それより、バスの時間を見計って上ノ井へ出て、手を上げれば停留場でなくても停まってくれる。バスに揺られる時間は長い、買出しは未だに三ノ井側の県道を使うことが多い。

ならばもう少し、情報が入ってきてもよさそうだが、このところと噂話すら聞かない。杉下はとにかく訪問してみることだと思ひ、思い切つてばら屋敷の玄関の前に立った。一時はばら園として、観光客が訪れたこともある面影がわずかに残っている。家の裏に広がる広大な平地に、かつては幾種類ものばらが手入れされて、見る人の目を楽しませてくれたであろう構築物の残骸があった。

杉下は思った。ばらがダメなら、イチゴとかナシとか、作つたらどうか。井ノ垣から三十五号線を上つて山に入り、吊橋を通つてばら屋敷までをハイキングコースとして売り出す。イチゴ狩りなどを楽しんでもらつて、帰りは上ノ井に出て、中ノ井からバスに乗つて帰つてもらふ。儲けようという考えではない。人の来ない裏ルートとして売り出せば、それなりにやりがいがあるのではないか。などと思つたが、長いサラリーマン生活を送つて、今は無事定年退職した、世間知らずのご隠居さんの、たわ言のように思えて、現実を見直した。

家の中から五、六歳ぐらゐの女の子が出てきて「どちら様ですか」とはつきり、標準に近い言葉で問いかけてきた。杉下は、話に聞いたことのある、貰われてきた女の子だと思つた。「杉下という者ですけど、お爺ちゃんか……」とまで言つて藤子をどう呼んでいいかわからず戸惑つていると、奥から「下ノ井の昌ぼうかえ、あがりんさい」という懐かしい言葉が飛んできた。藤子の父は臥せていた。ちよつと無理をして風邪をひいたらしい。このごろとんと身体が弱つて、家の中と回りの草取り程度しか出来なくなつた、ちよつと無理をしたらこの通り、寝込んでしまう始末で、と気弱なことをぼそぼそと言う。ご飯の煮炊きやら買い出しも大変だね、と誘ひ水

を注<sup>き</sup>してみる。「この子が利発な子でよく言うことを利<sup>き</sup>いてくれて助かっている」と、はらこ、はらこ何度も名を呼ぶ。よほど可愛いのだろう。山に囲まれた、原っぱの一軒家に生まれたから、藤子が原<sup>はらこ</sup>子と名付けたらしい。

原子がお茶を入れて持ってきた。お菓子も添えてある。よく出来ている。「お母さんは？」と訊ねてみると、原子は「きになって帰れなくなったの」と言う。何が気になつているのか、藤子の父に問いを振り向ける。藤子の父は苦笑して「実は」と話したことは、一週間前から藤子が家に帰らなくなったという。杉下は慌てた表情をして見せた。「捜さなければ」「黙つていいののか」という姿勢を見せるためである。父は「放つといてやんさい」という。藤子は、若い時から今まで、自分を犠牲にして生きて来た、一度ぐらゐ、家を数日、空けることがあつてもいいではないか、というのが父の見解だった。

しかし、杉下には、そう思えなかつた。半年前に新聞を止めたと聞いて、気になりだしたが、それどころではない。ここ数日の内に何かが起こつてゐる、藤子の父が思つてゐるようなことではない。この五、六歳の原子も気になる。貰ひ子の話を聞いたのは、たしか長女が高校生の時だった。その長女が結婚をして子どもまで居る。どう考えても十四年前の話だ。原子は歳を取らないのか。そんな奇妙なことは考えられない。杉下は、臥せてゐる藤子の父には悪いけれど、聞けるだけのことは聞き出しておきたいと思つて、原子の身の上を訊ねた。

原子が席を立つている間に、口早に語つたことは、藤子が自分の子として育てた娘が、中学生の時に子どもを産んだ。その子が原子で、今五歳だという。娘は卒業するまでもなくどこかへ行つてしまつたそうだ。もちろん卒業証書はもらつてゐるし、卒業したことになつてゐる。藤子がどんな苦勞をしたか想像がつく。

藤子の父は、話に連れて、どうして藤子は結婚しなかつたのか、それだけは何としてもわからないと嘆く。親の口から言うのも変だが、器量よしの方だし身体も丈夫だ。ちよつとぶつさらばうなところがあるが、氣立てはやさしい。いいお見合ひの話も何度かあつた。けれど藤子の方が浮かぬ顔をする。好きな男がいるのかと思えば、そうでもないらしい。先方が何

度か足を運んでくださったこともある。このボロ屋に、養子に入ってもいいという話もあったのに、藤子は返事をしなかった、という。

杉下は別の話題がないものかと、部屋の隅を見渡した。今では珍しい針で鳴らすレコードがあった。原子が視線を感じて、レコードにスイッチを入れようと駆け寄った。乗っているレコード盤の曲名は見ただけで「野中のばら」だとわかった。杉下は制して外へ出ようと言った。

外は昼下がりの太陽が眩しい。六十一歳の杉下は、五歳の原子に手を取られて、恋人同士が野原を行くような錯覚に陥った。原子は、久しぶりに安心して、喋ることの出来る相手が現れて楽しそうだ。どんとんと山裾を回り込んで行く。きになって動けなくなったお母さんに、会いに行くのだと言う。きになるって、何が気になるのかと問うと、気にする気じゃなくて、お母さんが、山に生えている植物の木になってしまったというのだ。

「お母さんって、藤子さんのことだね」と念を押す。そうだという。本当はお祖母さんなのだが、お母さんで通してきたらしい。

杉下は、まさか本当に藤子が木になったと信じているわけではない。しかし、家に帰らなくなつて一週間が経つのは事実だし、原子の言っていることは理解できないが、木になったというタイミングだけは合う。一緒に行けば何かを掴めるかも知れないという期待がある。

原子は突然振り向いて言った。目の瞳が青く光ったように思えた。「小父ちゃん。お母さんのこと、心配して来てくれたの？ どういう関係？」子どもは他愛のないことを喋っているかと思えば、時にビックリするようなことを、ずばり問うてくるときがある。子どもはかわいいが、時折ひらめく感覚が、怖くて恐ろしい。藤子との間に、取り立てて言われるような関係などない。しかし、五歳の原子は何かを感じ取っているのだろうか。「関係など何にもないよ。お爺さんはだいぶ歳を取ったし、どうしているかなと思って」とさりげなく言う。「ふうん」と素直に納得した。

吊橋の前に来た。杉下は初めてだった。原子は、眼下に霞んで見える谷底を、ものともせず、ひよいひよいと跨ぐように駆けていく。杉下は足がすくんで躊躇した。何しろ三十年前に出来たものだ、鉄がさびている、ロープは大丈夫か、心配が先に立つと足が出ない。原子が戻ってきて「小父ちゃん、怖い。手を繋いで行こう」という。五歳の子に手を繋いでもら

ったら、大丈夫ってことはないだろう、と心の中でつぶやいてみるが、今は優しい原子の言葉だけでも頼りだ。三十年の間には何度も架け替えられているはずだし、山で仕事をする人には、日常の通り道なのだ、と心に言い聞かせて何とか渡り終えた。「小父ちゃん、怖かった？」と言って原子がにっこりする。杉下は原子の手中にすっかり収まったように思われた。まだまだ山の人間になりえていないことを実感した。

橋を渡ると山の空気が一変した。重くどんよりした空気なのだ。吸うにも時間がかかるし、吐くにしてもゆっくり吐かないと全部出て行かないような気がする。いい天気なのに軽さがない。先を行く原子が振り向いてまたわらう。山の景色に溶け込んでいる。その原子に、引つ張られるような感じでようやく脚が動く。

原子は、昔ハイキングコースと言われた道を外れて、獣道に入っていく。ブッシュがひどくなつてきて、方向感覚を失ってしまった。しかし、原子がしょっちゅう来ているところだと思つて、安心して自分がある。五歳の女の子に手を引かれて、落ち着いている自分がおかしいように思うのだが、なぜか気分が安らかだ。

通り抜けると南に面した小さな高台に出た。木の匂いが違う。甘い匂いが混じってくる。杉下は、どうしてこの場所を知っているのかと、原子に訊ねた。原子はそれに答えず「お母さんがここにいる」と後ろの木を指差した。甘い空気の匂いが藤子の匂いだったことに気がつく。ここにたどり着いたときは気がつかなかったが、いま原子に言われて振り返ってみると、正に藤子がかそこにいるのだった。人の胸辺りの高さで、二股に分かれた大木があつて、一方は天高く伸びている。もう一方が藤子だった。足腰は二股に盛り上がった木になっていて、胸から上が人間藤子だった。両腕もあるし耳もある。髪の毛もあった。杉下とは五歳違いだから藤子は五十六歳、少し若いように見えるが五十代の藤子だった。十七歳の時に会ったきりだが、面影が残っている。はつきり藤子だとわかる。

杉下は思わず駆け寄って手を握った。「昌ほうだよ。杉下の昌ほうだ」と叫ぶと、顔をこちらに向けようとした。思うように首が回らないのか、足と腰が木になっている。口の動きも緩慢で、声を発するほどの動きがない。



杉下は、筋肉が硬直して木になっていく、このようなことがあるのだということを、はじめて知った。藤子が、どうしてこのようなことになったのかわからない。自分は野望を抱いて故郷を捨てた。苦労はあったにせよ、定年まで勤め上げ、普通の生活なら、一応食べていける年金をもらって、生活の基礎を作り上げてから、故郷に帰ってきた。観光客と同じではないか。藤子こそ、この山村で仕合せに暮らしてもらわねばならないのに。その藤子がどうしてこんなことになったのか、杉下には理解の出来ないことだった。

しかし、自分の奢りかもしれないと思直す。藤子からすれば、木になって山と同化するとは、山の人間になり切ることで、仕合せなことなのかもしれない。杉下は考えようもなくたずむばかりであった。

後ろに原子が立っていた。原子の瞳が青く光った。「小父ちゃん、わたし、お母さんと話が出来るよ」話、できるの？ なら頼む「即座に答えていた。長い言葉は無理だから、短い言葉にして」という。杉下はさっそく原子に「フリーデリーケという人を知っているね」と藤子に訊ねてくれるよう頼んだ。原子は言われたとおり「フリーデリーケという人を知っているね、と小父ちゃんが言っているよ」と大きな声で藤子の木に向かって言った。すると晴天の空にそびえる木の葉が、そよ風に揺られて、はらはらと鳴った。そして藤子の目尻から一粒の水滴が流れ落ちた。

どうしたのか原子が、五歳の子どものなかに大人のような顔をしていた。急に口数が減ってしまった。お母さんは何と答えたのか、知っていると言ったのか、知らないと言ったのか、問うても答えてくれなかった。「陽が暮れると、小父ちゃん、怖いから」と言うとき、原子は帰り支度を始めた。帰りの道も、原子はやはり無口だった。その原子がやっと口を開いてくれた。「お母さんは、小父ちゃんの問いかけを聞いて、すごく喜んで」と言った。杉下は「教えてくれてありがとう」と原子の手を握って、感慨にふけた。杉下からの暗号が藤子に通じたのだ。それは藤子が一生掛けて発信し続けたシグナルを、傍受した者にしか思いつかない暗号だった。吊橋のところを差し掛かった。原子は元の元気な子に戻っていた。杉下の手を引いて吊橋を渡っていく。中央付近に来たとき、原子が急に手をほいて向き直った。瞳が青く光った。「あんなに嬉しそうなお母さんの顔、

見たの、初めて。家族のわたしにも見せなかった、あの嬉しそうなお母さんの顔。いい、いい、いい。」「杉下に言葉はなかった。



名村和実

なむら かずみ

1944年生まれ 鈴鹿市出身  
1997年「太宰治論」などで三重県文学新人賞受賞(評論部門)  
2001年 小説「手廻女山行」で中部ペンクラブ文学賞受賞  
短編小説集『ジギ谷』  
中部ペンクラブ副会長  
文芸誌「海牛」「文芸中部」「宇宙詩人」

